



## 子どもはいろいろ、ゴールもいろいろ

園長 野中 泉

今年も無事アトムフェスティバル（運動会）を終えました。うちの運動会は、子どもたちがつくる運動会です。親に見てらう本番のためだけに子どもの力量以上の訓練をして準備するのではなく、子どもたちが悩んだり、考えたりしながら作っていくその途中の毎日からアトムフェスは、始まっています。大人が一律に決めたゴールへの達成を競うのではなく、子どもたちが自分で決めた目標に挑戦する姿を応援する運動会です。こんなふうに説明しても、初めてアトムフェスに参加するすいか組の事前懇談会では、毎年「子どもがしたいことをするってどういうこと？」「みんなと同じことを頑張らせる経験も必要だと思うけど？」とたくさんのクエスチョンマークが飛び交います。今年のすいか組の懇談会でもそうでした。でも、一度でもアトムフェスティバルを見てもらった保護者の方たちが、「こういうことか」と合点してくれるのも毎年のことです。加えて、見る前は我が子の出来不出来だけを心配していた親たちから、見終わると名前も知らない他のクラスの子の頑張りにまで感動したという声が出るのも、アトムフェスならではです。

今年のフェスも様々に見どころがありましたが、恒例の5歳児のたたみ登りには今年も泣かされました。ふたりの大人が支える畳の高さは1間（約180cm）。子どもたちは自分の身長の数倍くらいある畳に向かって思いっきり走って飛びつき手をかけ、よじ登って畳の向こう側に下ります。ただ、それだけの単純な競技なのですが、子どもたちが畳をにらみつけ、口を真一文字に結んでよじ登るその姿に、毎年力がはいり、胸がいっぱいになります。通常の挑戦はひとり3回、でも今年も3回の挑戦では登れなかった子たちが何人か残りました。担任の志賀ちゃん（志賀保育士）は、登れなかった子だけを園庭の真ん中に集めて聞きました。「どうしたい？」「悔しい。もう一回やりたい」と涙しながら絞りだす声で言ったのは、練習では超高の畳（ちょうたか：畳を垂直にたてること）に登れていたみおちゃんです。他の子からも口々に「もう1回やりたい」と言う声があがり、登れなかった子たちの再挑戦が始まりました。ほとんどの子が、「少し下げて」と自分で考えて最初の挑戦より畳の角度を下げてもらって成功していく中、さっきまで泣いていたみおちゃんはそれでも「超高！」と角度を変えません。一度目の再挑戦はまた失敗。志賀保育士が「もう1回」と声をかける前に自分で急いでスタートラインに戻ったみおちゃんは、もう一度「ちょうたかぁ！」と大声で叫びます。まっすぐにそびえたつ畳に向かって全力疾走、そしてまっすぐに伸ばした手は畳の上をしっかりと掴み、大歓声の中畳の上にまたがりました。畳の上の彼女の誇らしげな笑顔は、自分で決めた頑張りだからこそ、気持ちよさに溢れていました。

もうひとり、一番最後まで成功できずに残ったとあちゃん。ピッと笛が鳴ると一生懸命畳まで走るのですが、そびえたつ畳が怖くて、直前で失速してしまいます。手の先が畳のはじまで届いているのに、高い畳の上へ乗り向こう側に下りる勇気がどうしても出ません。「怖い～」と、とうとう泣き出したとあちゃんですが、ピッと吹かれた笛に条件反射のようにまた走り出しました。泣きながらも畳に飛びつきぶら下がるとあちゃん、怖くてずり落ちてきそうになる足をともっきー（山本保育士）が支えます。いつの間にかみかん組の子どもたちが「とあ！とあ！」と声を揃えて声援を送り、その声援は、みかん組、すいか組の保護者席にも広がって「とあ！とあ！」と会場中が大合唱になりました。それでも、どうしても怖くて畳が越えられないとあちゃん。その時志賀ちゃん（志賀保育士）が畳の向こう側に走って周り、にっこり笑いながらこう言ったのです。「大丈夫やで、ここにいるから。怖くないで。抱きとめてあげるから、自分で超えておいで」。とあちゃんは泣きながらもともっきー（山本保育士）に足を支えられ必死によじ登り、最後は自分で手を伸ばし志賀ちゃん（志賀保育）の首に抱きついて畳の向こう側に下りました。その姿にそこにいた子どもも大人も大歓声、大拍手です！超高を自分だけの力で登り切ったみおちゃんと、安心できる大人の力を借りながら初めて畳の向こう側に下りたとわちゃん。ふたりのゴールは違います。でもずるいと言う子はいませんでした。それぞれが自分の精一杯のゴールを成し遂げたことが、そこにいたみんなにわかったからだと思います。